熱布バックケア実践報告

熱布バックケア実施のヒントにご活用ください。

無断転載は禁止します。

＜事例の概要＞

食欲がなく医師が終末期と捉えていた後期高齢の肺炎併発患者がワンセットケアにより食事摂取が可能となり栄養状態も改善して自宅退院できた

過程	記録欄
このような対象者に	９０歳代女性、心不全で他院入院中転倒し左大腿骨頸部骨折で手術。術後、インフルエンザ発症しＡＤＬ低下とともに仙骨部に褥瘡発生。リハビリ目的で転院。一時歩行器を使っての歩行まで回復したが、１か月後に肺炎併発し、経口的な食事摂取ができなくなったため中心静脈ラインを確保し高カロリー輸液開始。肺炎の症状が改善し、嚥下機能は保たれていることを確認できたため食事を再開したが全く経口摂取を受け付けず。 入院約２か月後、主治医より「褥瘡もあり、高カロリー輸液を施行しているが、高齢でもあり、元気になるのは難しい。本人が早く眠らせて欲しいと訴えるので、酸素と点滴１本のみで、自然にまかせましょう」と積極的治療を行わないこととした。看護の力の見せ所と思い、ワンセットケアを実施することとした。
どのように行ったら	腹臥位+熱布バックケアの「ワンセットケア」を毎日継続して実施した。食事の提供は継続して行っていた。
このような反応が見られた	継続してワンセットケアを行ったが、最初は病院食を全く摂取できなかった。家族が差し入れるプリンやゼリーを食べることが時折あった。ワンセットケア継続２週間ほどして病院食を摂ることができるようになり、約１か月後には朝食・昼食をほぼ全量摂取、さらにその３週間後には３食全量摂取。褥瘡も治癒し、入院後約５か月で自宅退院となった。

＜プロジェクトからの一言＞

医師は「終末期患者」として考えていたが、看護師が継続的・積極的にワンセットケアを行ったことによって、自宅復帰が可能となった事例である。まさに、看護の力が発揮できたと考える。